

# 昔むかし の キンダーブック<sup>②</sup>

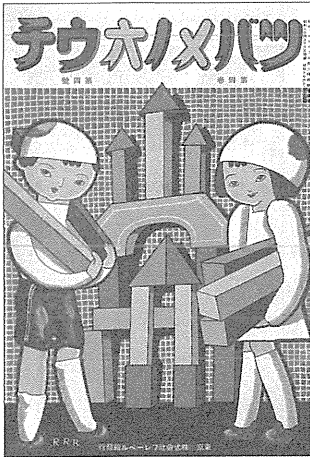
## 『ツバメノオウチ』にみる戦前の遊戯作品

小栗百子

(舞踊教育家)

付録『ツバメノオウチ』

『キンダーブック』創刊の五年後、昭和七（一九三二）年に『ツバメノオウチ』は付録として創刊されました。『キンダーブック』の解説



▲画像1 『ツバメノオウチ』  
創刊号表紙  
武井武雄 画（昭和7年）

だけでなく、童話・昔話・手技・遊戯など幼稚園の先生に対するもの、弁当の作り方・病気の予防など母親向けのものが記されており、両者に対する指導書的な役割を担っていたと考えられます。<sup>注1</sup>

また、創刊号の扉ページに、「キンダーブックは、幼稚園の幼児のための観察絵本でありまして、近來教科書として御採用の幼稚園が多くなつたことは、如何にこの絵本が優良であるかを物語るものでありまして、本社の光栄とする所であります。併し、観察のみでは児童の情操教育の上に物足りない感があり

小栗百子（おぐりももこ）  
お茶の水女子大学大学院博士前期課程 舞踊・表現行動学コース修了。（株）ポピンス勤務。

ますので今度『ツバメノオウチ』を創刊してこれをキンダーブックに添付して、完全なものにいたしたいと存じます。」と記されるように、特に保育者や保護者に対して、情操教育に関する記事を提供する目的で創刊されたことがわかります。

### 『ツバメノオウチ』における遊戯作品

『ツバメノオウチ』には創刊以来、当時の優れた振付家らによって子どものために創作された遊戯作品が多数掲載されていました。戦前、昭和七（一九三二）年の創刊号から昭和十二（一九三七）年まで、土川五郎、島田豊、石井漠によって作品が提供されています。遊戯作品の多くは、伴奏曲の楽譜と共に、図または写真と解説文によって振付が示されています。

戦後の復刊後、昭和二五（一九五〇）年より再び遊戯作品が掲載され、昭和三一（一九

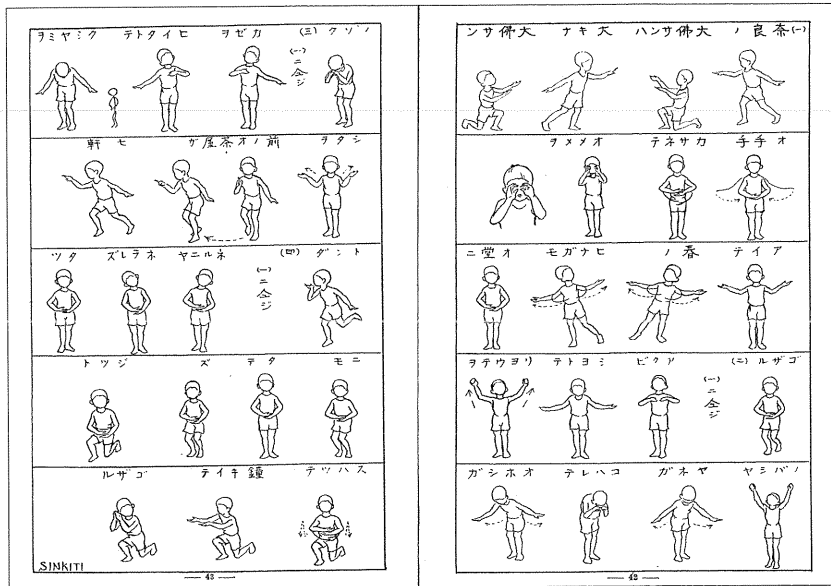
五六）年までの六年間は、ほぼ毎号に、賀来琢磨、戸倉ハル、翠川淳、則武昭彦、石井はるみ、安藤寿美江、増子とし、石井みどりらによって作品が提供されました。

幼児教育に多大な影響を与えた『キンダーブック』の付録『ツバメノオウチ』に掲載される遊戯作品は、保育者や保護者を啓蒙し、当時の舞踊教育を象徴するものであったのではないのでしょうか。本稿では特に、戦前の遊戯作品を舞踊教育の立場から紹介していきます。

### 土川五郎振付「奈良の大佛さん」

はじめに、戦前の『ツバメノオウチ』創刊より十一作品を提供している土川五郎（注）の初期の作品「奈良の大佛さん」（西條八十作詞／中山晋平作曲）を紹介します。

土川の作品では、おおよそ一小節ごとに歌詞を区切り、それに振り付けられている動き



▲画像2 遊戯「奈良の大佛さん」振付図 土川五郎 振付・東山新吉 画  
『ツバメノウチ』第4巻第6號（昭和7年6月）P42-43 【資料提供：大阪府立中央図書館国際児童文学館】

を絵と文章で示しています。手の動きによって歌詞の内容を表現する振付が多く見られます。「オ手手」で両手を重ね、「オメモヲ」で両手を丸くして眼鏡のように両目に当て、「アイテ」ではその両手を左右に開くといったように、歌詞の言葉と対応して振り付けられ、次々に動きが展開していきます（画像2）。このように振付において歌詞が重要な要素であったことがわかります。

また、土川の作品では、一つの動きに対して手足の動かし方、目線や首の角度、指先の動きまで細やかに解説がされています。「すくひあげる様に腹部の前へ持ちきたり掌を上にして両手を重ねる」とあるように、身体部位の位置や動かし方を具体的にわかりやすく示し、振り付けた動きが忠実に再現できるように解説がなされています（画像3）。

奈良の大佛さん 振付

振付 土川五郎

「舞踏家…奈良の大佛さん…」

大佛さん…奈良の大佛さん…

大佛さん…奈良の大佛さん…

大佛さん…奈良の大佛さん…

大佛さん…奈良の大佛さん…

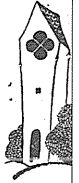
大佛さん…奈良の大佛さん…

▲画像3 遊戯「奈良の大佛さん」図解説明 土川五郎 振付 『ツバメノウチ』第4巻第6號 (昭和7年6月) P46-47 【資料提供:大阪府立中央図書館国際児童文学館】

石井漢振付「水泳日本」

現代舞踊家である石井漢<sup>漢</sup>は、二十五作品を提供しています。「水泳日本」という作品(和田古江 作詞/林みつよし 作曲)は、二小節または四小節ごとに区切られた歌詞と動きが、写真付きで説明されています。

石井の作品には「スキップ」「ツーステップ」「円形の経路を描きながらのジャンプ」など、子どもにとって高度な洋舞の動きが多く取り入れられています。また、『「○ド」にて両足を揃へたまま、体を前に稍倒し、顔は前方を見て両手を第一図の如く後に伸ばす。』とあるように、歌詞の一字と動きのタイミングを合わせるよう、動きの解説が記されており、舞踊に熟練していない保育者や子どもにとって難易度の高い遊戯作品であったことが想像されます。また解説文の最後には、「この踊りは、水泳選手が水を切つて進むやうな力



# 童踊 水泳 日本

(森田 古江氏作曲)

振付 石井 漢



前奏(四小節)  
元氣よく手を振つて四歩(二小節)進み、次の二小節はスキップで三歩進み、四歩目に正面に向つて止る。



## ○ドント イツパツ

「ド」にて兩足を揃へたま、體を前に傾倒し、顔は前方を見て兩手を第一圖の如く後に伸ばす。「ント」にて爪立となつて手を後から前上方に揃へ第二圖となる。



## トビコム センシユ

「ト」にて膝を少し屈けて、前上方にある兩手を額の下に膝を張つて第三圖の如く揃へる。



## ○サット アガッタ

始めの停止符で第五圖の如く、膝を少し屈けて兩手を合はせ右側につける。「サット」にて右足を右に踏出すと同時に、手を第六圖の如く一ぱいに伸ばし、又は第五圖の如き形を返る。「ガ」にて第六圖の形となり、「ツク」にて右足踏



6

5

4

3

2

1

— 14 —



## シヤキノ ナカラ

「シヤキノ」にて兩手を揃へ左足より二歩にて一廻りし、「ナカ」にて左側に向き足を揃へて第七圖の如き形となり、「ヲ」にて、足を上げて體をやや前方に倒し、第八圖の如く兩手を前上方に伸ばす。



## ビツチ アゲテク ジングウ プール

第九圖の如く、左手を前方に伸ばしたま、右手は膝を屈して膝の處に掌を下に向けて置き、左足足にて跳び、「アゲテク、ジングウ」にて反対の足にて交互に跳び乍ら左廻りし、「プール」にて正面を向き、手を前方に揃へ、左足を後に上げて第十圖となる。



9



10



11



12

## スキエイ ニツボン

「スキエイ」にて、手を揃つて振りながら元氣よく左足よりスキップ二歩にて後退し、「ニツボン」にて足を揃へると同時に膝を少し屈けて後から大きく跳し、跳んで足を揃えて、手は上方に挙げて第十二圖の形となる。

【注意】この踊りは、水泳選手が水を切つて進むやうな力強さで、元氣よく踊つて下さい。昔の運動は極めて自由で、固くならぬ様にして下さい。學級の運動でやる様には振付けませんが、固くても踊れます。

— 15 —

▲画像4 童踊「水泳日本」解説文 石井漢 振付 『ツバメノウウチ』第6巻第11號 (昭和9年11月)「セカイイチ」P14、P15

強さで、元氣よく踊つて下さい。首の運動は極めて自由に、固くならぬ様にして下さい。学芸会の舞台でやる様に振付けましたが、円陣でも踊れます。」と一つ一つの動きに対する説明のほかに作品全体に対する「注意」を示しており、どのようなイメージを持つて子どもたちに踊ってほしいのかという振付家の思いが語られています(画像4)。

また当時、水泳の前畑秀子選手がオリンピックでメダルを獲得し、話題となっていました。「セカイイチ」がテーマの『ツバメノウチ』においても、日本を沸かせていた水泳が遊戯の題材として取り上げられたことが想像できます。

### 戦前の『ツバメノウチ』における舞踊教育

今回紹介した二つの作品に共通して、歌詞が振付において重要な要素であったことが明らかとなりました。解説文では、細やかに動

きが説明されており、子どもたちのために振り付けられた音楽・詞・動きが一体となった遊戯作品を忠実に踊ることが当時の情操教育の一つとしてとらえられていたことが想像できます。またこれらの遊戯作品は、歌詞からわき出るイメージを動きとして創出したものもあり、子どもが歌詞の世界観や言葉のイメージを合わせて楽しめるものだったのでないでしょうか。

#### 注

- 1 『京都女子大学図書館資料特別展観 戦前のキンダーブック』京都女子大学・京都女子大学短期大学部図書館 二〇〇七年 pp.9-10
- 2 土川五郎(一八七一一一九四七) 元来小学校教師であったが、研究を重ね、幼児の遊戯の指導にあたった。「律動遊戯」や「表情遊戯」を提唱。
- 3 石井漠(一八八六一一九六二) 現代舞踊家。幼児への舞踊指導に関しては、自身の研究所においての指導にあたり、保育者や学校教員を対象にした講習会で講師を務めていた。

\*引用文は一部、新字体に変えてあります。